

F-20 農家生活の構造とその変容(第Ⅱ報)

林学園女子短大 O 谷田沢典子

皇学館大・岐阜女子大 岡田照子

目的 家庭経営体質、環境とのか、わりの中で、どのような過程を経て生活を変容・発展させてゆくか、A家の実態の中に追跡研究する。第22回日本家政学会中部支部総会において発表した第Ⅰ報(そのⅠ)A家の地域的環境、社会環境としての近隣とのか、わり、特にその互助的機能、(そのⅡ)昭和8、9年における生活の構造、に引き続き、本報告では、昭和17、18年の時局における生活の実態及び変容を捉える。

方法 第Ⅰ報にあげた、A氏記帳の農家経済調査簿、農業経営調査簿、宝恵帳等記録、大内賞受賞統計表等の資料分析、A氏及びその親族・知人との面接聞き取り、居住地域の社会民俗調査による。

結果 昭和8、9年は実質上A氏の主体的生活の出発時にあたり、家族構成上はまだA氏の弟妹が家に残り労働力は豊かであり、社会経済的には農業恐慌からの回復期に当たって、A氏の積極的な農業経営上の方策や、生活改善がかなり効果をあげていた、いわば生活者の主体性が生かされた時代であった。

昭和17、18年は、第二次世界大戦がたけつわとなった大きい時代的背景の中で、生産活動にも、消費生活にもその影響が強くあらわれる。家族構成的には、A氏の弟妹はすべて婚出して核家族形態となり、子供らはまだ幼く、加えてA氏の社会的地位は極めて多忙な社会協力活動を強制するため、生産活動が不十分となり農業所得にも影響がみられる。消費生活内容には大きい変化はないものの、支出は引続き上昇して、18年の家計は、昭和7年以來はじめて赤字となった。